高塚遺跡２次

2011

(財)浜松市文化振興財団

高塚遺跡2次

2011

(財)浜松市文化振興財団

例　言

1．本書は、静岡県浜松市南区高塚町 931-1 における高塚遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、東海道本線高塚駅自由通路新設事業に先立ち実施した。

3．調査名は、2008年9月1～12日に実施した確認調査を第１次調査として、今回の本発掘調査を第２次調査とする。

4．調査期間　現地調査　2010 年 9 月 15 日～ 2010 年 11 月 30 日
整理報告　2010 年 12 月 1 日～ 2011 年 3 月 18 日
（契約日 2010 年 9 月 14 日、完了日 2011 年 3 月 18 日）

5．調査体制　調査委託者　浜松市長 鈴木康友（浜松市都市計画部区画整理課）
調査受託者　財団法人 浜松市文化振興財団（理事長 伊藤修二）
調査指導機関　浜松市教育委員会
（浜松市生活文化部文化財課が補助執行）
調査担当者　浜松市生活文化部文化財課
仲川美津保　大野勝美　熊谷洋子

6．調査面積　1,050㎡

7．本書の執筆・編集は大野勝美が担当した。

8．調査に係る費用は、全額浜松市が負担した。

9．調査に係る諸記録および出土遺物は、浜松市生活文化部文化財課が保管している。

凡　例

1．挿図の方位は真北であり、標高は海抜を示す。

2．本書の座標値は、世界測地系に準拠する。

3．遺構の略記号は下記の通りである
SD：溝　SK：土坑　SP：小穴　SR：河川　SX：不明土坑

目　次

第１章　調査の経緯と経過…… 1
　１　調査に至る経緯
　２　調査の方法
　３　調査の経過
第２章　周辺の調査と第１次調査…… 5
　第１節　周辺の調査
　第２節　第１次調査
第３章　地理的・歴史的環境…… 12
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第４章　調査の成果…… 15
　第１節　基本層位
　第２節　遺構と遺物
第５章　まとめ…… 30
　第１節　古代東海道の道筋
　第２節　砂堤上の縄文集落
参考文献…… 34
写真図版

挿図目次

第 1 図　高塚遺跡位置図 ……1
第 2 図　基準杭位置図 ……1
第 3 図　高塚遺跡周辺での調査 ……6
第 4 図　土層柱状図１ ……7
第 5 図　土層柱状図２ ……8
第 6 図　試掘出土土器 ……9
第 7 図　第１次調査と第２次調査 ……10
第 8 図　第１次調査出土土器 ……11
第 9 図　高塚遺跡周辺の遺跡 ……13
第 10 図　高塚遺跡の基本層位 ……15
第 11 図　縄文土器出土位置図 ……16
第 12 図　遺構全体図 ……17
第 13 図　縄文土器実測図・拓本 …… 18
第 14 図　古代の遺構 …… 19
第 15 図　SR01 遺構図…… 20
第 16 図　遺構出土遺物 …… 21
第 17 図　中世・時期不明の遺構 …… 22
第 18 図　SR02 遺構図…… 24
第 19 図　SR02 出土遺物…… 25
第 20 図　SX 遺構図 …… 26
第 21 図　SR02・包含層出土遺物 …… 27
第 22 図　律令期の西遠江 …… 30
第 23 図　古代東海道想定図 …… 31
第 24 図　砂堤列分布図 …… 32

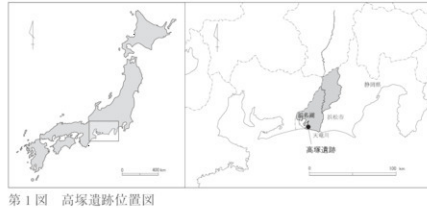
挿表目次

表１　座標一覧表……2
表２　周辺調査一覧表……5
表３　遺構対応表……10
表４　周辺遺跡一覧表……13
表５　遺物観察表１…… 28
表６　遺物観察表２…… 29
表７　南部平野の縄文遺跡…… 33

第１章　調査の経緯と経過

１．調査に至る経緯

高塚遺跡は浜松南部海岸平野の浜松市南区高塚町に所在する。浜松南部海岸平野には８条の砂堤列が形成されており、そのうちの北から３番目の第３砂堤上のほぼ中央部に位置している。高塚遺跡は、ＪＲ高塚駅周辺の広い範囲で古代～中世の土器が表面採集されたことから知られるようになった遺跡であり、その後に３回の試掘調査と１回の工事立会いが行われたが、遺跡の性格や規模の詳細についてはほとんど不明のままであった。

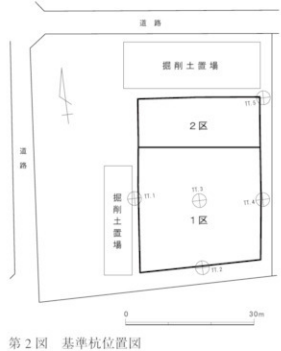


第１図　高塚遺跡位置図

2008年、浜松市南区高塚町931-1において、ＪＲ高塚駅周辺地区整備事業に先立ち、高塚遺跡の範囲確認調査が実施された。調査は、幅２m、長さ50m前後の溝を３条掘削する方法によって行われ、古墳時代～戦国時代の遺構と遺物が発見された。これを高塚遺跡第１次調査と呼ぶ。

そして2010年、同地（浜松市南区高塚町931-1）に東海道本線高塚駅の自由通路を新設することになり、それに先立ち発掘調査を実施することになった。第１次調査によって調査対象地の西側部分は現代建物の基礎工事で遺構が撹乱されていることが判明していることから、調査範囲は遺構が残存している東側の1,050㎡と決まった。

調査は、浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部文化財課が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施することになった。



第２図　基準杭位置図

２．調査の方法

調査の方法　高塚遺跡の土壌は砂および砂質土であるため遺構の崩壊が速いことと、掘削土を

場内に保管するための行程上の都合により、調査区を2分割して調査を実施した。南側に位置する広い調査区を1区、北側に位置する調査区を2区と呼称した。

1区の調査では、重機で掘削した一次掘削土（表土）を調査区北側および西側に山積みにして保管し、また2区の一部を掘削して、その場所を1区で発生した二次掘削土の仮置場とした。1区の調査は順調に進み、計画通りに完了した。

2区の調査計画では、2区で発生した一次掘削土（表土）を1区へ運んで埋めていく予定であった。ところが、一次掘削土置場に余裕があったことと、意外にも土壌の粘性が強く遺構の崩壊が遅いことから、全景写真を撮影するために1区を埋めずにそのまま残して置くことにした。

2区は東側から表土を掘削し、重機により掘削土を順次、一次掘削土置場へ移動させた。二次掘削土は一輪車で調査区北西隅へ運び、そこに待機している重機により掘削土置場に移動させた。

基準点の設置　測量の基準となる基準点杭（TT1～TT5）を設置した。TT1の数値は、世界測地系でX座標＝－144916.314、Y座標＝－75039.202、標高＝2.465mである。

その他の基準点の数値は表1の座標一覧表に示す。

点名	X座標	Y座標	標高
TT.1	－144916.314	－75039.202	2.465
TT.2	－144934.202	－75025.296	2.266
TT.3	－144918.572	－75024.207	1.882
TT.4	－144919.989	－75009.479	2.239
TT.5	－144896.365	－75006.614	2.126

表1　座標一覧表

表土除去　表土は重機（バック・フォー）を用いて掘削・除去した。1区の廃土（1次掘削土）は1台の4トンダンプカーで場内の仮置き場に運搬して保管した。2区の廃土（1次掘削土）は重機（バック・フォー）を用いて掘削し、バック・フォーのバケットには平爪を装着し、遺構・遺物の有無を確認しつつ、少しずつ慎重に掘り進めた。そしてバック・フォーによる掘削を遺物包含層の上面で止めた。

遺構検出・掘削　金鍬と鋤簾（じょれん）を用いて人力により遺物包含層を掘削・除去し、鋤簾を用いて遺構検出を計った。検出した遺構は半裁もしくは土層帯を残して慎重に掘り下げ、細部は移植ゴテや竹ベラ等で仕上げた。主要な遺構は、慎重に土層観察をして埋没状況の把握に努め、土層断面図を作成した。

図面作成　遺構平面図は、上記5点の基準点を基にトータル・ステーションを設置して、遺跡管理システム（CAD）にて測量および作図し、最終的には縮尺20分の1で印刷・保存した。土層断面図は縮尺20分の1、遺物出土状態図は縮尺10分の1で作成した。土層断面図と立面の図化にあたっては、各基準点の標高値を基準とした。

写真撮影　カメラは主に6×7判を用い、他に35mm判とコンパクト・デジタルカメラを使用して撮影した。フィルムはモノクロとカラーリバーサルを使用した。作業工程のメモ写真等はコンパクト・デジタルカメラを使用した。

また高所からの撮影にはローリングタワー（3段）を用いた。

3．調査の経過

・現地作業

(2010 年)

10 月 4 日（月） プレハブ現場事務所の設置
6 日（水） 発掘道具および測量器材の搬入
7 日（木） 重機（バック・フォー）により１区の表土掘削（１日目）
8 日（金） 重機（バック・フォー）により１区の表土掘削（２日目）
12 日（火） 重機（バック・フォー）により１区の表土掘削（３日目）、現場作業員の初日
13 日（水） 包含層掘削作業および遺構検出作業
14 日（木） 溝から縄文土器が出土（４点）
15 日（金） 包含層掘削作業および遺構検出作業
19 日（火） 溝から縄文土器が出土（５点）
20 日（水） １区南東部の遺構検出作業、遺構掘削作業
21 日（木） 雨天のため現場作業休止、事務所内で図面整理
22 日（金） SD11 と SD14 を掘削
25 日（月） 精査および遺構検出作業、１区の調査をほぼ完了
26 日（火） １区全体の清掃、写真撮影の準備
27 日（水） １区の写真撮影（全景、各遺構）
28 日（木） 雨天のため現場作業休止
29 日（金） １区の補足調査、台風接近により台風対策
11 月 1 日（月） 台風の影響による大雨で調査区全体が水没
2 日（火） 水中ポンプによる排水作業、事務所内で土器の洗浄
4 日（木） 重機（バック・フォー）により２区の表土掘削
5 日（金） 重機により２区の表土掘削、土馬の破片が出土
9 日（火） SR02 の掘削および精査
10 日（水） SR02 の掘削および精査
11 日（木） SR02 の掘削および精査
12 日（金） SR02 の掘削および精査、元浜松市博物館長、向坂鋼二氏来跡
15 日（月） 調査区の清掃、全景写真撮影
16 日（水） 縄文土器出土地点周辺の掘り下げ、縄文土器２点出土
18 日（木） 縄文土器出土地点周辺の精査
19 日（金） 縄文土器出土地点周辺の精査
22 日（月） 雨天のため現場作業休止

24日（水）　土器の洗浄、遺構平面図作成、測量
25日（木）　遺構平面図作成、測量
26日（金）　調査区西壁の土層図測量、土器の洗浄、図面整理
29日（月）　発掘道具の運搬、図面整理
30日（火）　発掘道具および測量器材の運搬
12月1日（水）～10日（金）
現場プレハブ事務所において基礎整理

・整理作業

（2010年）
12月13日～（2011年）3月18日、
土器注記、土器接合、土器復元、
土器・石器実測、遺物撮影、図面編集、
写真編集、原稿執筆、文章校正・他

※高塚遺跡発掘調査参加者
現地調査　石田則廣　石塚辰男
佐々木與左エ門　鈴木清
植松雅子　植松桃代
大澤妙子　水野すゞ代
整理作業　島田智佳子　森下朋子

遺構検出作業

縄文土器出土

大雨により水没

第２章　周辺の調査と第１次調査

第１節　周辺の調査

高塚遺跡周辺　高塚遺跡周辺では、過去に４回の試掘調査、２回の工事立会い、１回の範囲確認調査（第１次調査）が行われている。以下、簡単に紹介する。

① 1993 年１月 14 日に行われた試掘調査で、場所は高塚駅のすぐ南側である。調査対象地内に３×３ｍのトレンチを６ヵ所掘削して調査した。調査結果は、第１、２、５、６トレンチにおいて遺物包含層を確認した。

② 2007 年 11 月 29 日に行われた工事立会いで、場所は高塚駅の北方約 300 ｍにあたる。調査結果は、遺構および遺物は発見されず、土層の堆積状況から湿地であったと推定されている。

③ 2008 年５月 15 日と同年６月 10 日に行われた試掘調査で、場所は高塚駅の南約 50 ｍにあたる。調査対象地内に２×２ｍのトレンチを４ヵ所掘削した。調査結果は、全てのトレンチで遺物包含層を確認し、７～８世紀の須恵器と土師器、中世の山茶碗等が出土した。遺跡範囲内と推定された。

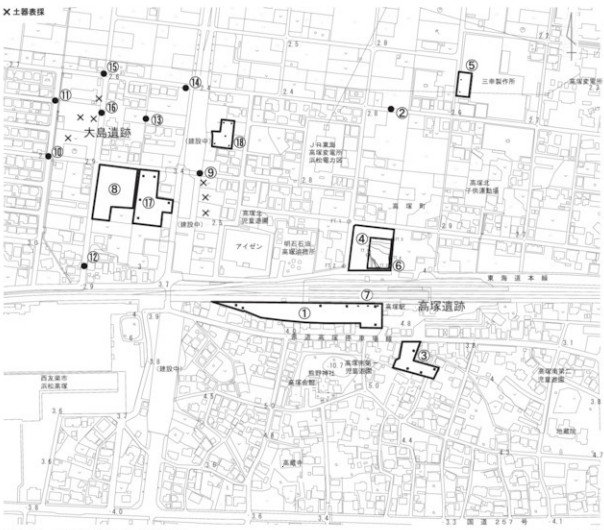
④ 2008 年９月１日～９月 12 日に行われた範囲確認調査（第１次調査）で、詳細は後述する。

⑤ 2010 年４月６日に行われた工事立会いで、場所は高塚駅の北方約 350 ｍにあたる。調査対象地内に２ヶ所のトレンチを掘削した。調査結果は、南側のトレンチから土師器の小片が出土して、遺跡の立地が予想されている。北側は湿地であった。

⑦ 2010 年 11 月４日に行われた試掘調査で、場所は高塚駅のすぐ南側である。①の調査対象地の北

番号	調査目的	年月日	遺跡名	出土土器	遺構	備考
1	試掘	'93. 01. 14	高塚遺跡		あり	
2	工事立会い	'07. 11. 29				湿地
3	試掘	'08. 05. 15		須恵器・土師器・かわらけ・土師質土器	あり	飛鳥・奈良・戦国時代
	試掘	'08. 06. 10		土師器・須恵器・山茶碗	あり	飛鳥・奈良・鎌倉時代
4	１次調査	'08. 09. 01～		須恵器・土師器・灰釉陶器		飛鳥・奈良・鎌倉時代
5	工事立会い	'10. 04. 06		土師小片	あり	古代、中世
6	２次調査	'10. 09. 15～		須恵器・土師器・灰釉陶器		飛鳥・奈良・鎌倉時代
7	試掘	'10. 11. 04				
8	試掘	'99.	大島遺跡			
9	工事立会い	'04. 11. 05			なし	
10	工事立会い	'04. 11. 29			なし	
11	工事立会い	'05. 11. 17		須恵器・土師器小片	あり	奈良・中世
12	工事立会い	'06. 10. 30		なし	なし	
13	工事立会い	'07. 11. 07		なし	なし	湿地
14	工事立会い	'07. 11. 07		なし	なし	湿地
15	工事立会い	'07. 12. 07		土師小片	なし	湿地
16	工事立会い	'08. 01. 17		土師器・須恵器	なし	
17	試掘	'10. 05. 13		なし	なし	
18	試掘	'10. 10. 15		須恵器・土師器		
				内耳鍋・羽釜・かわらけ・灰釉皿		

表２　周辺調査一覧表



第3図　高塚遺跡周辺での調査

東隅であり、1.5×2ｍのトレンチを3ヶ所掘削した。結果は、出土遺物が小片で数量的にも少なく、古代に遡る遺構や安定した包含層もないことから、遺跡の隣接地と判断された。

大島遺跡周辺　大島遺跡では、過去に3回の試掘調査と8回の工事立会いが行われている。

⑧ 1999年に行われた試掘調査で、場所は大島遺跡の南側にあたる。詳細は不明である。

⑨ 2004年11月5日に行われた工事立会いで、場所は大島遺跡の東側にあたる。

⑩ 2004年11月29日に行われた工事立会いで、場所は大島遺跡の西側にあたる。

⑪ 2005年11月17日に行われた工事立会いで、場所は大島遺跡の西側にあたる。

⑫ 2006年10月30日に行われた工事立会いで、場所は大島遺跡の南側にあたる。

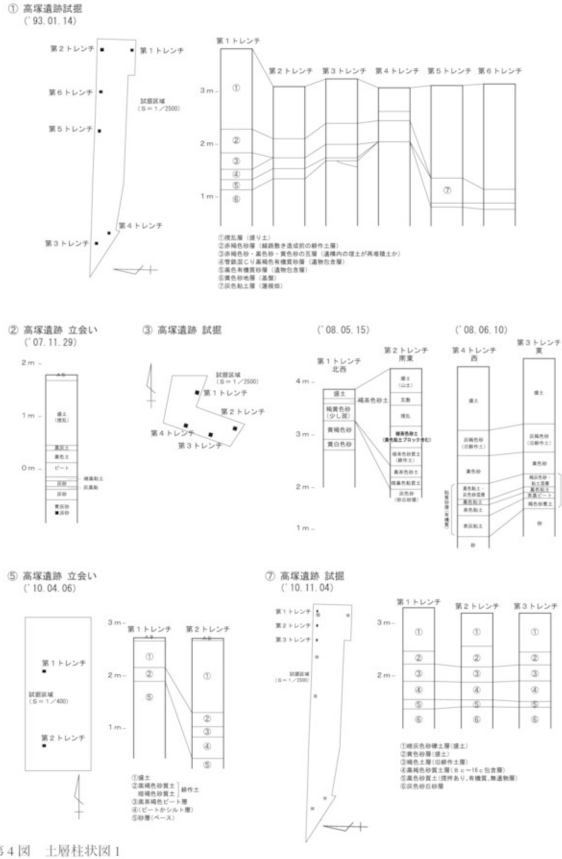
⑬ 2007年11月7日に行われた工事立会いで、場所は大島遺跡の中央部にあたる。

⑭ 2007年11月7日に行われた工事立会いで、場所は大島遺跡の北側にあたる。

⑮ 2007年12月7日に行われた工事立会いで、場所は大島遺跡の北側にあたる。

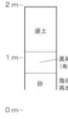
⑯ 2008年1月17日に行われた工事立会いで、場所は大島遺跡の中央部にあたる。

⑰ 2010年5月13日に行われた試掘調査で、場所は大島遺跡の南側にあたる。

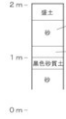

① 高塚遺跡試掘
('93.01.14)
第1トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
第4トレンチ
第5トレンチ
第6トレンチ
試掘区域
(S＝1／2500)
3m
2m
1m
①撹乱層（盛り土）
②赤褐色砂層（線路敷き造成前の耕作土層）
③赤褐色砂・黒色砂・黄色砂の互層（遺構内の埋土が再堆積土か）
④管鉄混じり黒褐色有機質砂層（遺物包含層）
⑤黒色有機質砂層（遺物包含層）
⑥黄色砂地層（基盤）
⑦灰色粘土層（蓮根畑）
② 高塚遺跡 立会い
('07.11.29)
③ 高塚遺跡 試掘
('08.05.15)
('08.06.10)
第1トレンチ
北西
第2トレンチ
南東
第4トレンチ
西
第3トレンチ
東
盛土
褐黄色砂（少し泥）
黄褐色砂
黄白色砂
褐茶色砂土
⑤ 高塚遺跡 立会い
('10.04.06)
第1トレンチ
第2トレンチ
試掘区域
(S＝1／400)
①盛土
②黒褐色砂質土
暗褐色砂質土
耕作土
③黒茶褐色ピート層
④（ピートかシルト層）
⑤砂層（ベース）
⑦ 高塚遺跡 試掘
('10.11.04)
第1トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
試掘区域
(S＝1／2500)
①暗灰色砂礫土層（盛土）
②黄色砂層（盛土）
③褐色土層（旧耕作土層）
④黒褐色砂質土層（8c～16c包含層）
⑤黒色砂質土（撹拌あり、有機質、無遺物層）
⑥灰色砂丘砂層

第4図　土層柱状図1

⑨ 大島遺跡 立会い
(`04.11.05)



⑩ 大島遺跡 立会い
(`04.11.29)



⑪ 大島遺跡 立会い
(`05.11.17)

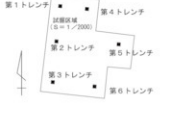
⑫ 大島遺跡 立会い
(`06.10.30)

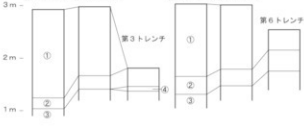
⑭ 大島遺跡 立会い
(`07.11.07)

⑮ 大島遺跡 立会い
(`07.12.07)

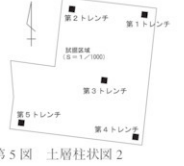
⑯ 大島遺跡 立会い
(`08.01.17)

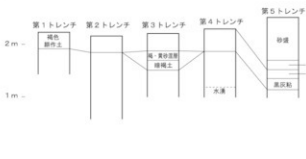
⑰ 大島遺跡 試掘
(`10.05.13)



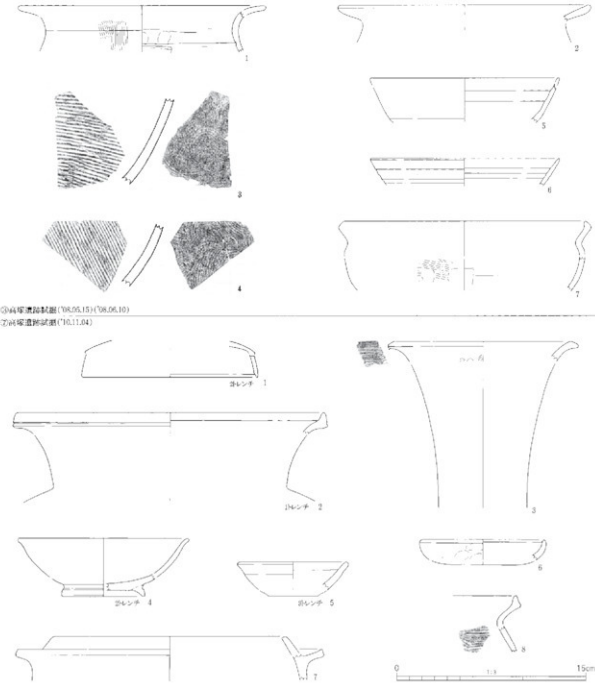


⑱ 大島遺跡 試掘
(`10.10.15)





第5図　土層柱状図2



第６図　試掘出土土器

⑱ 2010 年 10 月 15 日に行われた試掘調査で、場所は大島遺跡の東側にあたる。

⑪、⑮、⑯で土器が出土しており、またその周辺で土器が表面採取されている。

出土土器　第６図上半は、高塚遺跡の③試掘調査で出土した土器で、１と２が土師器甕、３と４が須恵器甕、５と６が須恵器坏身で、時期は奈良時代である。７が戦国時代の内耳鍋である。

第６図下半は高塚遺跡の⑦試掘調査で出土した土器で、１が古墳時代の須恵器蓋、２が奈良時代

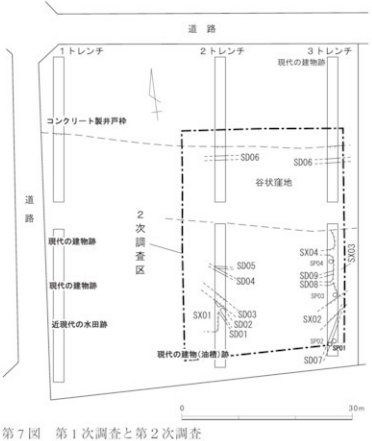
の須恵器甕、3が奈良時代の長頸壺、4が平安時代の灰釉陶器、5が鎌倉時代の山皿、6が戦国時代のかわらけ、7が戦国時代の羽釜、8が戦国時代の内耳鍋である。

第2節　第1次調査

概　要　2008年9月1日～9月12日に、ＪＲ東海道本線高塚駅周辺地区整備事業に先立ち、浜松市南区高塚町931-1で実施された高塚遺跡の範囲確認調査である。面積3,000㎡の調査対象地に、幅2ｍのトレンチ3条（合計面積332㎡）を掘削して調査が行われた。調査結果は、7～8世紀、12～13世紀、16世紀の土器が出土し、明確な建物跡は検出できなかったが、奈良時代、鎌倉時代、戦国時代の集落跡が南東方向に広がっていると推定された。

検出遺構　1トレンチでは、現代建物の基礎工事によって撹乱されて、遺構は残っていなかった。2トレンチでは、溝（SD01～06）と不明土坑（SX01）を検出した。3トレンチでは、溝（SD06～09）、不明土坑（SX02～04）、小穴（SP01～04）をを検出した。時期はSD05とSD06が奈良時代で、その他は中世以降と考えられる。

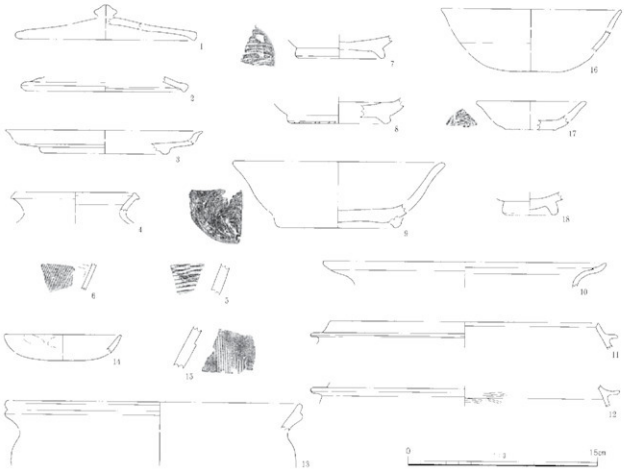
第2次調査の位置　第7図は第1次調査対象地と第2次調査区の位置関係を示す。第1次調査全体図に第2次調査区の外郭線を合成したものである。図でも分かるように、第2次調査区は、第1次調査対象地の南東部にあり、2トレンチと3トレンチの南半部にあたる。



第7図　第1次調査と第2次調査

第1次調査		第2次調査
SD01	⟶	SR01
SD02	⟶	SR01
SD03	⟶	SR01
SD04	⟶	SD04
SD05	⟶	SD05
SD06	⟶	SD06
SD07	⟶	SD07
SD08	⟶	SD08
SX01	⟶	SX13
SX02	⟶	SX02
SX03	⟶	SX03
SP01	⟶	SP01
SP02	⟶	SP02
SP03	⟶	SP03
SP04	⟶	SP04

表3　遺構対応表



第８図　第１次調査出土土器

表３は第１次調査の遺構名と第２次調査の遺構名の対応関係を示した一覧表である。極力、第１次調査の遺構名をそのまま使用するようにしたが、一部変更したものがある。例えばSD01、SD02、SD03は、それら全部を合わせてSR01であった。

出土土器　第８図は高塚遺跡第１次発掘調査報告書の遺物図面を再トレースしたものである。第１次調査では、細片であるが、奈良時代、鎌倉時代、戦国時代の土器が出土した。

１は奈良時代の須恵器の摘蓋であり、２も同様の摘蓋であろう。３は奈良時代の須恵器の盤であり、口縁部を欠く。４は奈良時代の須恵器壺で、５と６は須恵器甕である。７は12世紀、８と９は13世紀の山茶碗で、10は13世紀の伊勢型鍋である。11と12は羽釜、13は内耳鍋、14はかわらけ、15はすり鉢であり、時期は戦国時代である。16はSD05から出土した奈良時代の須恵器碗、17は山皿、18は瀬戸碗である。

第３章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高塚遺跡周辺の地形は、北に広大な三方原台地、東に肥沃な天竜川南部平野、西に豊富な水を湛える浜名湖、南に豊かな浜松市南部海岸平野が広がっている。その南部海岸平野には、現中田島砂丘の第８砂堤を含む８条の砂堤列が海岸線に対して平行に形成されている。最初に形成された第１砂堤は三方原台地南端の崖下にあり、現在はその上を雄踏街道が東西方向へ一直線に通っている。第１砂堤は比較的大規模であり、東端の中村遺跡から西端の浜名湖付近まで、三方原台地の崖に接して続いている。第２砂堤は、細くかつ途切れぎみに認められるにすぎないが、この砂堤上に伊場遺跡と城山遺跡が立地している。第３砂堤は最も規模が大きくかつ安定しており、この上を現在の東海道本線と旧国道１号線が東西方向に通っている。中世から近世の東海道もこのルートと考えられており、また古代の東海道もこのルートが有力視されている。その第３砂堤のほぼ中央に高塚遺跡が広がっており、古代～中世～現代における重要交通路の要衝に位置している。そしてその南に、順に第４～第８砂堤が海岸まで平行に並んでいる。砂堤の間には、砂堤列間湿地が形成されており、水田や沼地になっているところが多く、また近年まで第３砂堤と第４砂堤の間に高塚池や沼田池と呼ばれた大きな池が残っていた。

砂堤列が形成された時期は、各砂堤上の遺跡の分布と土器出土状況からみて、縄文時代中期には少なくとも第３砂堤まで、古墳時代前期には第５砂堤まで形成されかつ陸地化していたと推定されている。砂堤上は居住に適した場所であり、狩猟や漁撈の拠点となっていたのであろう。

第２節　歴史的環境

・縄文時代

浜松市南部地区における縄文時代の遺跡の多くは、三方原台地の縁辺部や台地から伸びた丘陵上に分布している。代表的な遺跡としては蜆塚遺跡と長者平遺跡が知られており、ともに後期から晩期にかけての集落跡である。蜆塚遺跡は三方原台地南東部における拠点的集落であり、長者平遺跡は浜名湖東岸から三方原台地南西部にかけての拠点的集落である。

しかし近年の発掘調査によって、台地上のみならず南部海岸平野においても縄文時代の遺跡が次々と発見されるようになってきた。平野部における縄文遺跡の形成は、本格的な海退期に入り生活可能な基盤ができた縄文時代後期以降であったと考えられてきた。しかしながら、南部海岸平野における発掘調査事例が増えるに従い、前期まで遡る可能性が出てきた。第１砂堤に立地する梶子北遺跡と中村遺跡では前期末から中期初頭の礫群とともに土器と石器が出土している。他に、角江遺跡、東前遺跡、村西遺跡、東野宮遺跡、高塚遺跡などがあり、第５章で詳しく紹介する。

第９図　高塚遺跡周辺の遺跡

1	高塚遺跡	19	梶子北遺跡	37	玉子遺跡
2	高塚町村中遺跡	20	三永遺跡	38	中平遺跡
3	大島遺跡	21	下山田遺跡	39	中平古墳群
4	八幡山遺跡	22	戎新畑Ⅱ遺跡	40	坊ヶ峠遺跡
5	瓦塚遺跡	23	東野宮遺跡	41	東前遺跡
6	堤町村東遺跡	24	井村遺跡	42	志都呂町中村遺跡
7	新橋町村東遺跡	25	増楽町村北遺跡	43	北平遺跡
8	旧大通院境内遺跡	26	八反田遺跡	44	スコヤ遺跡
9	増楽遺跡	27	入野古墳	45	中脇遺跡
10	若林町村西遺跡	28	浜地遺跡	46	中田尻遺跡
11	東若林遺跡	29	入野町村前遺跡	47	上幸遺跡
12	村裏遺跡	30	大平遺跡	48	篠原町本村遺跡
13	村東遺跡	31	町田遺跡	49	篠原町仲村遺跡
14	九反田遺跡	32	角江遺跡	50	国方遺跡
15	伊場遺跡	33	カヤノ遺跡	51	坪井町新田北遺跡
16	城山遺跡	34	熊野東遺跡	52	篠原町西前遺跡
17	梶子遺跡	35	旧花学院境内遺跡	53	八幡前遺跡
18	中村遺跡	36	市郎遺跡		

表４　周辺遺跡一覧表

・弥生時代

弥生時代前期の西遠江は、縄文土器から系譜を引く条痕文土器の分布地帯となっており、わずかではあるが西日本に広く分布している遠賀川系土器が搬入されている。この時期の西遠江は、まだ本格的な沖積平野への進出が始まっておらず、三方原台地の縁辺部に集落を築き、平野部には、少数の遺物と遺構が認められるだけである。南部海岸平野においては、中村遺跡、角江遺跡、東前遺跡などが知られている。そして弥生時代中期中葉（瓜郷様式期）になると、本格的な沖積平野への進出が始まり、平野中央部で中核的な集落が営まれるようになる。南部海岸平野では、梶子遺跡、梶子北遺跡、中村遺跡、角江遺跡がある。本格的な水稲農耕が行われた証拠に、上記の遺跡から多量の木製農具や石製工具および農具未製品が出土している。弥生時代後期になると、中核的な集落はさらに大規模化し、また周辺部に新たな集落が出現する。伊場遺跡群（梶子遺跡、梶子北遺跡、中村遺跡）を例にとると、梶子遺跡は東西数百ｍにおよぶ大環濠集落に発展しており、そして南東側に、三重の環濠をもつ伊場集落、環濠から家形土器が出土した鳥居松集落、畷東集落が出現する。

ところが弥生時代後期後半になると、上記の集落はすべて廃絶もしくは規模を縮小している。この時期の沖積平野には分厚く粘土層が堆積していることから、洪水等により度々冠水して集落を営めない環境になっていたと考えられる。集落は居住に適さず放棄されたと考える。

・古墳時代

三方原台地南縁から南部海岸平野の前期の遺跡としては、梶子北遺跡、堤町村東遺跡、中平遺跡、坊ヶ跡遺跡、大平遺跡、鹿小路遺跡、弁天島湖底遺跡などがある。しかしこれらの集落と関連する前期古墳は発見されていない。低地では、古墳時代前期も引き続き湿地化していて居住に適さない環境であったとみられ、中平遺跡、坊ヶ跡遺跡、大平遺跡など台地上に大集落が営まれていた。

中期になると、土壌の乾燥が進み居住可能な環境に戻ったとみえ、小規模ながら集落が営まれるようになる。伊場遺跡の大溝周囲に竪穴住居が築かれている。この時期の代表的な古墳に入野古墳がある。入野古墳は海岸平野を見下ろす台地端に築かれた直径44ｍの大型円墳である。

後期に集落数は増え、また集落の建物の数も大きく増加する。第１砂堤上に中村遺跡と三永遺跡があり、第２砂堤上に城山遺跡がある。この時期の注目すべき遺物に、伊場大溝と呼ばれている自然流路の底から金銀製円頭大刀が出土している。この地方の有力者が居住していたとみられる。

台地上に蜆塚古墳群、富塚地蔵平古墳群、など小規模な古墳群がある。

・奈良・平安時代

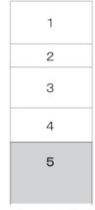
南部海岸平野には、遠江国敷智郡の郡衙関連施設が置かれていたと推定される伊場遺跡、城山遺跡、梶子遺跡、梶子北遺跡、中村遺跡、九反田遺跡、鳥居松遺跡があり、その他に東野宮遺跡、若林村西遺跡、若林村東遺跡、角江遺跡、東前遺跡などが確認されている。また南部海岸平野の砂堤列に沿って、古代東海道が整備されていた。古代東海道は第３砂堤上を通っていた可能性が高いが、もしそうであれば、高塚遺跡の横を古代東海道が通っていたことになる。

・中世　律令制度は、平安時代になるとすっかり形骸化し、各地に荘園が形成されるようになる。伊場・城山・梶子北遺跡の敷智郡衙関連遺跡も10世紀末までには消滅している。公領の荒廃化と裏腹に荘園経営が盛んになり、当南部海岸平野では、浜松荘が経営されていたと資料にある。

第４章　調査の成果

第１節　基本層位

土層の堆積状況は、上から順に第１層、第２層、第３層、第４層、第５層の単純な水平堆積である。第１層は、青灰色の砕石もしくは円礫を含む三方原台地の黄色粘質土であり、近年の宅地および駐車場を造成した時の埋立土である。第２層は、堅く締まった灰褐色粘質土層であり、造成工事前の旧水田面である。調査区の西側と北側に多く認められ、南東側は堆積していなかった。第３層は、暗褐色砂質土層であり、古代と中世の土器片を多く含んでいる。この層は中世以降に堆積したものと判断した。第４層は、未分解の有機物が多く認められる黒褐色砂質土層であり、古代の土器片を小量含んでいる。この層は古代に堆積したものと判断した。第５層は、黄灰色砂層であり、基盤層である。この層は遺物をまったく含まない。



第 10 図　高塚遺跡の基本層位

遺構検出面は、時間的な制約があることから、基盤層（第５層）上面に設定した。重機による掘削を基盤層上面から約５cm 上で止め、その後は人力で掘削・精査して遺構検出を計った。検出した遺構の時代は、主に遺構から出土した土器片で判断したが、土器が出土しない場合は埋土の色で判断した。黒褐色系の埋土が入っているものを古代の遺構と考え、暗褐色系の埋土が入っているものを中世以降の遺構と考えた。しかし実際には、時期不明の遺構が多かった。

第２節　遺構と遺物

概　要　１区は、古代の遺構として湾曲した多数の溝、１条の川、数基の小穴などを検出し、中世の遺構として数基の土坑と数条の溝を検出した。遺物は、縄文中期土器、古代の須恵器と土師器、灰釉陶器、土馬、中世の青磁、山茶碗、鉄滓が出土した。

２区はほぼ全域が川で、数基の時期不明の土坑や溝を検出した。遺物は、古代の須恵器、土師器、灰釉陶器、中世の陶磁器、山茶碗、土錘が出土した。

（１）縄文時代の遺物

縄文土器

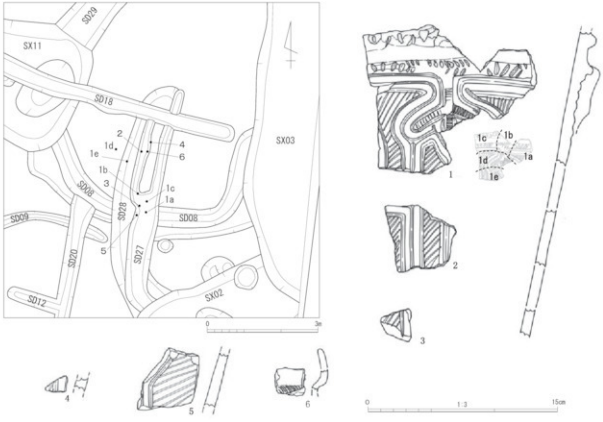
［位置］１区の東側を精査中に縄文土器片４点が出土した。その後も周辺から数点ずつ出土して、

最終的には11点となった。その中で図化できたものが10点あり、それらの出土位置を第11図に示す。縄文土器10点のうち、8点がSD27から、1点がSD28から、残り1点がSD28に近接した地点から出土した。SD27およびSD28から出土した9点は、それぞれの溝の上層に位置していた。1a～1eの5点は、離れた地点から出土したにも係らず、接合することができた。

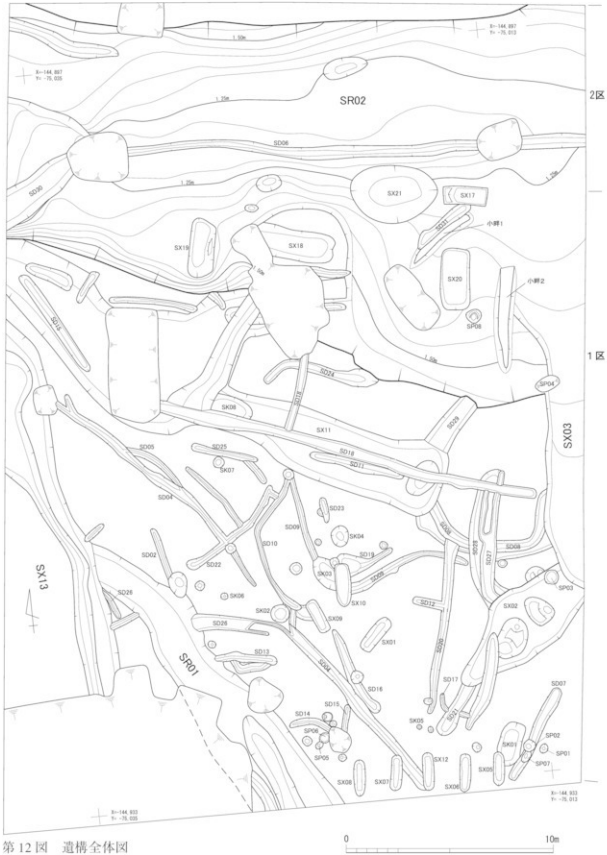
［遺構］SD27は深さ約5㎝の浅い溝で、途中から2つに枝分かれしている。水は、溝底部の高低差からみて、南から北へ流れていたと推定される。SD28はSD27の下部に位置する深さ約10㎝の溝である。SD27とSD28は同じ溝であった可能性もあるが、現場では埋土の違いから別の遺構と判断した。SD27とSD28からは縄文時代以外の土器はほとんど出土しなかった。溝の時期であるが、埋土からみて、明らかに中世以降であった。縄文土器は、中世以降のある時期に南から溝の中を流れてきたか、もしくは中世以降に溝を掘削した時、破壊されたと考える。

［住居？］縄文土器が出土した時、SD08が気になった。理由は、①SD08はSD27とSD28に切られており、明らかにSD08の方が古い、②周壁溝のような半円形の深い溝である、③溝の外側に壁のような立ち上りが認められた、④縄文土器のすべてが溝の内側で発見されている等である。

SD08は住居内の壁溝もしくは住居外の周溝と想定して、周辺で掘削・精査を繰り返したが、炉跡や柱穴跡などの確証を得ることができる遺構は検出できなかった。



第11図　縄文土器出土位置図


SR02
SR01
SX13
SX03
SX01
SX02
SX04
SX05
SX06
SX07
SX08
SX09
SX10
SX11
SX12
SX15
SX16
SX17
SX18
SX19
SX20
SX21
小畔1
小畔2
SP01
SP02
SP03
SP04
SP05
SP06
SP07
SP08
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
2区
1区
0
10m

第 12 図　遺構全体図

[土器] 土器は1a～1e、2、3、4で1個体分、5で1個体分、6で1個体分の合計3個体分が出土した。1～4の土器と5の土器は非常に類似した紋様を持つために同一個体ではないかとの疑問を抱いたが、最終的には斜線紋の間隔が異なっていることから別固体と判断した。

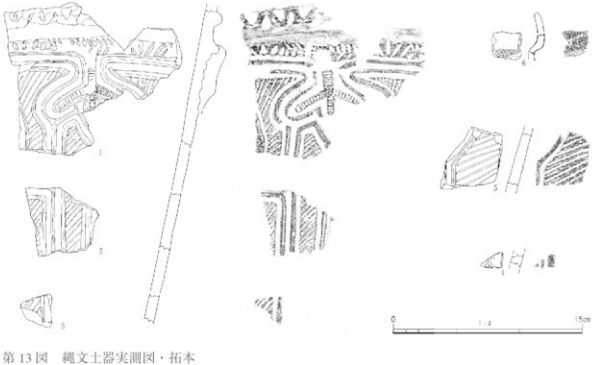
器形は3固体とも深鉢で、紋様は半裁竹管で突帯を引き、ヘラ状工具で突帯上に刻み目を入れ、また突帯内の空間を斜線紋で満たしている。これら3個体の土器は、いずれも今から約5000年前の縄文時代中期前半の土器である。西遠江においては、この時期の土器の出土例は少なく、土器様式および編年の研究は進んではいない。したがって関東地方の土器編年でみると、五領ヶ台式と勝坂Ⅰ式の中間あたりに位置すると考えられる。近いところでは、西側の愛知県縄文土器編年の山田平式や東側の袋井市に標識遺跡をもつ大畑C2式に類似点が認められる。

（2）古代の遺構と遺物

溝（SD02） 1区の西側にある溝で、南端が撹乱坑で切られている。土器はまったく出土しなかった。掘削時期は、埋土の色などからみて、奈良・平安時代であろう。

溝（SD05） 1区の西側にある溝で、両端が中世の溝で切られている。土器は出土しなかった。埋土の色からみて、古代の遺構と判断した。湾曲している溝は古代の遺構のようである。

溝（SD06） 2区のSR02最深部で検出した幅約50cmの溝で、SR02の中央部を東西方向に一直線に



第13図　縄文土器実測図・拓本

伸びている。西端は中世のSD30に切られて不明である。溝の断面形はU字形をしており、人為的に掘削したことは明らかである。土器は、7（第16図）の須恵器坏身が出土した。時期は、出土土器と埋土の色から奈良時代の遺構と判断した。掘削した目的は不明である。

溝（SD08） 1区の東側にある半円形の溝で、東側が中世のSX03で切られている。竪穴住居ではないかと考え、何度も精査を繰り返したが、確証を得るものは発見できなかった。土器は出土しなかった。時期は、埋土の色からみて、古代であろう。

溝（SD09） 1区の中央部にある溝で、途中で折れ曲がっている。土器は出土しなかった。時期は、埋土の色からみて、古代であろう。

溝（SD10） 1区の中央部にある湾曲した長い溝で、小破片の土器が少し出土した。掘削時期は、埋土および土器片からみて、古代である。

溝（SD11） 1区の中央部にある中世土坑の底部で検出した溝で、東西方向にまっすぐ伸びている。土器は、8の須恵器有台坏身が出土していることから、溝の掘削時期は奈良時代と考える。

溝（SD13） 1区の南側にある短い溝で、SR01に接続している。

土器は出土しなかった。時期は、埋土の色から古代と考える。

溝（SD14） 1区南側にある湾曲した短い溝で、東端が撹乱坑で切られている。土器は、9の須恵器有台坏身と10の須恵器摘蓋が出土している。掘削時期は奈良時代である。

溝（SD15） 1区の南側にある短い溝で、南

第14図　古代の遺構

端が撹乱坑で切られている。土器は出土しなかった。

溝（SD16） 1区の南側にある溝で、まっすぐ伸びている。中世のSD04に一部が切られている。土器は出土しなかった。時期は、埋土の色から古代と判断した。

溝（SD24） 1区の北側にある短い溝で、やや湾曲している。東端はSR02に切られている。小量の土器片が出土したが、図化できたものはない。

溝（SD25） 1区の中央部にある溝で、東西方向に伸びている。土器は出土しなかった。埋土が黒褐色砂質土であり、他の溝と同じであることから、古代の遺構と判断した。

溝（SD26） SR01に続く溝で、本来は2条の溝であったと思われる。小量の土器片が出土したが、図化できたものはない。

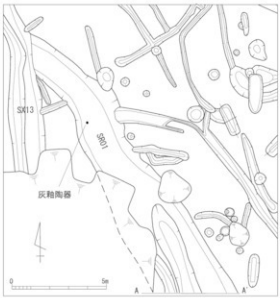
不明土坑（SX17） 2区のSR01最深部東側にある方形の遺構で、底部の西端がやや高くなっていた。土器は出土しなかった。古代のSR02は浅く幅が狭かったと推定されることから、SX17は古代に掘削されたと考える。掘削の目的は不明である。

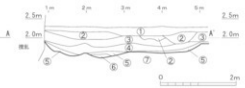
不明土坑（SX18） 川岸がSR02に突き出た部分にある方形の土坑で、黒褐色の埋土が詰まっていた。古代の土器片が少量出土したが、図化できるものはなかった。黒褐色の埋土と古代の土器片から、古代の遺構と判断した。掘削の目的は不明である。

不明土坑（SX19） SX18のすぐ西側に位置する土坑で、やや変形した隅丸長方形をしている。少量の土器片が出土したが、図化できるものはなかった。周辺の状況からみて、古代の遺構と判断した。掘削の目的は不明である。

不明土坑（SX20） 1区の北東部にある隅丸長方形の土坑で、SR02の浅い南岸に位置している。12の奈良時代の土師器坏が出土した。時期は奈良時代と推測する。掘削された目的は不明である。SX20の周辺から、土馬が出土した。

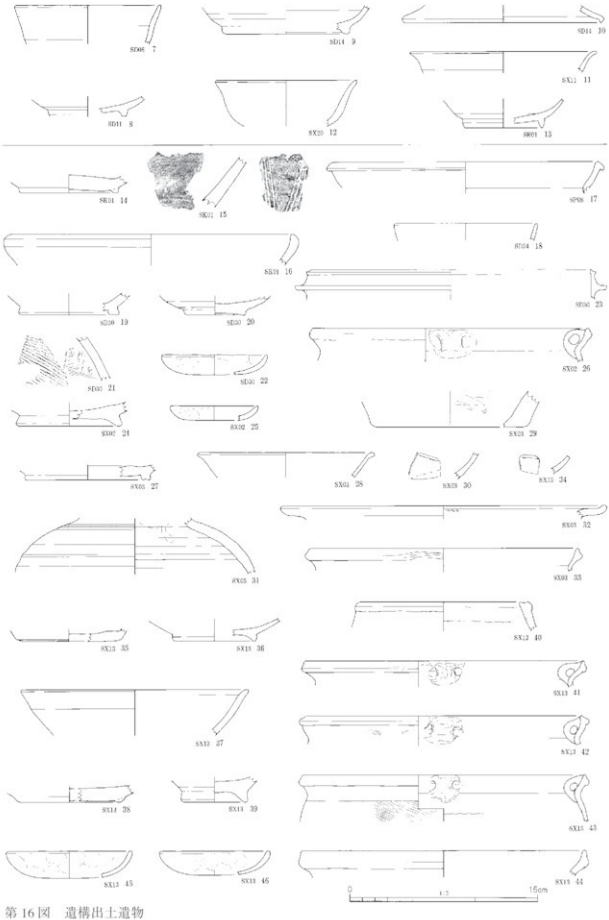
不明土坑（SX21） 2区のSR02最深部近くにある楕円形の土坑で、土器は出土しなかった。時期は、周辺の状況からみて、奈良時代と推測する。





①黄褐色砂質土（レキを含む）表土
②暗褐色砂質土（円レキを多く含む）
③暗褐色砂質土（旧耕作土）
④暗褐色砂質土（黄褐色及び黒色ブロックが混ざる）
⑤白黄色砂質土（暗褐色ブロックが混ざる）
⑥暗褐色砂質土
⑦黄灰色砂（地山）

第15図　SR01遺構図


SD08 7
SD14 9
SD14 10
SX11 11
SD11 8
SX20 12
SK01 13
SK04 14
SK01 15
SP08 17
SK01 16
SD04 18
SD20 19
SD30 20
SD30 23
SD02 21
SD30 22
SX02 26
SX02 24
SX02 25
SX03 29
SX05 27
SX03 28
SX03 30
SX10 34
SX03 32
SX05 31
SX03 33
SX12 35
SX13 36
SX12 40
SX13 41
SX12 37
SX13 42
SX14 38
SX13 39
SX13 43
SX13 45
SX13 46
SX13 44
0
1:3
15cm

第16図　遺構出土遺物

川（SR01） 1区の南西部に位置し、南東から北東に伸びる川である。西岸が現代の建物の基礎によって広範囲に撹乱されていた。流れの方向は、底面の標高値からみて、明らかに北流していた。また土層図からも分かるように、急な流れはなかったと思われる。土器は、灰釉陶器の小破片が川の南側で多く出土したが、北側ではほとんど出土しなかった。したがって、この時代の集落の中心部は調査区の南側外にあり、そこから流れてきたと思われる。

第15図に示した黒丸の地点から13のK90窯式新段階の灰釉陶器が出土した。他に出土した土器片も10世紀代であることから、この川が機能していた時期は平安時代の短い期間であったと推定される。

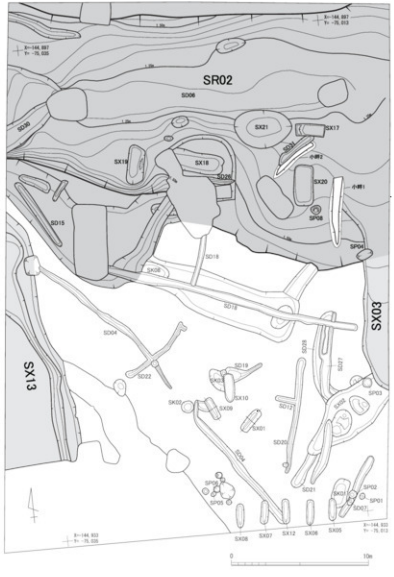
（3）中世の遺構と遺物

土坑（SK01） 1区の南東隅にある隅丸長方形の土坑で、中世以降のSX05に切られている。土器は、14～16が出土した。14は14世紀の山茶碗、15と16が中世のすり鉢である。遺構が掘られた時期は、土器からみて、14世紀頃であろう。

小穴（SP08） 1区の北東部にある小穴で、17の戦国時代の内耳鍋が出土した。遺構は戦国時代であろう。近くに小畔があることから、水田耕作に伴うものであろう。

溝（SD04） 1区の南東から北西に伸びる溝で、中央が少し途切れている。土器は、非常に少なく、18の中世陶器片だけである。

溝（SD07） 第1次調査で検出されていた溝であり、今回の調査で両端が少し伸びた。土器は出土しな



第17図　中世・時期不明の遺構

かった。

溝（SD12） SD20から直角に伸びる短い溝で、埋土の色から中世の遺構と判断した。土器は出土しなかった。

溝（SD18） 1区の中央部を横断する溝で、途中で直角方向に分岐している。埋土からみて、中世以降の遺構と判断した。土器は、奈良～戦国時代の小片が少し出土した。

溝（SD20） 1区の東側を南北方向に伸びる溝で、北端がSD08に切られている。土器は出土しなかった。

溝（SD22） 1区の中央部にある溝で、SD04と直角に交差している。土器は出土しなかった。SD04と同色・同質の埋土であったことから、中世の遺構と判断した。

溝（SD30） SR02最深部の西側にある深い土坑で、東端は現代建物の基礎工事による撹乱坑に切られている。土器は、19～23が出土した。中世の土器に混じって奈良時代の土器が多く出土していることからみて、奈良時代のSD06を壊してSD30ができたと推測する。

溝（SD31） 小畔1の北側に掘られた溝で、中世に営まれていた水田の排水溝であろう。土器は出土しなかった。

不明土坑（SX02） SX03に接続する土坑で、底部に2ヶ所の深い窪みが認められた。土器は、24～26が出土した。24は12世紀の山茶碗、25は中世のかわらけ、26は15世紀の内耳鍋である。古代の土器片も少量出土したが、大多数は中世の土器片であった。そのため、SX02を中世の遺構と判断した。

不明土坑（SX03） 1区の東端にある大きな土坑の一部で、他の大分部は東側の調査区外へ広がっている。土器の出土状況からみて、戦国時代の川の可能性がある。いずれにしても、流れはほとんどない。土器は、南側を中心に奈良～戦国時代の27～33が出土した。27は奈良時代の須恵器有台坏身、32は奈良時代の土師器甕、28は平安時代の灰釉陶器碗、29は壺の底部、30は天目茶碗、31は壺の肩部、33は戦国時代の内耳鍋である。

不明土坑（SX13） 1区の西側にある大きな土坑の一部で、他の部分は西側の調査区外へ広がっている。SX13の東寄りに深い溝があることから、戦国時代の川である可能性が高いが、確証がないために不明土坑とした。川であれば、底面の標高値からみて、北流していたと考えられる。速い流れはなかったようである。土器片も南から流れてきたものとみられ、南側から多く出土し、北側は非常に少なかった。

土器は、奈良～戦国時代の35～46が出土した。35は奈良時代の須恵器坏身、36は平安時代の灰釉陶器碗、37～39は中世の山茶碗、40は中世の土釜、41～44は戦国時代の内耳鍋、45と46は戦国時代のかわらけである。

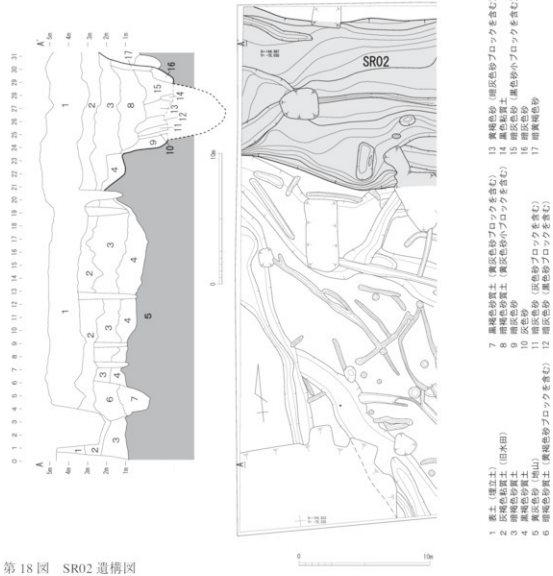
川（SR02） SR02は幅10数mの浅い川で、2区のほとんど全域を占め、東西方向に伸びている。古代から中世まで機能していたと思われるが、詳細な分層発掘ができなかったため、時代経過による川幅変化は把握していない。しかし川の最深部に奈良時代のSR06が掘られていることからみて、古代には川の水量が少なかったのか、もしくは湿地化していたと思われる。いつの時代にも、土層の堆積状況からみて、急な流れはなかったとみられる。

小畔２　SR02が南側に広がった浅い部分で検出した小畔で、最大高が約15cmである。明確に検出できた。北側は川で削られたためか、消滅していた。これも中世の水田に伴うものと判断したが、どこまで遡れるか不明である。

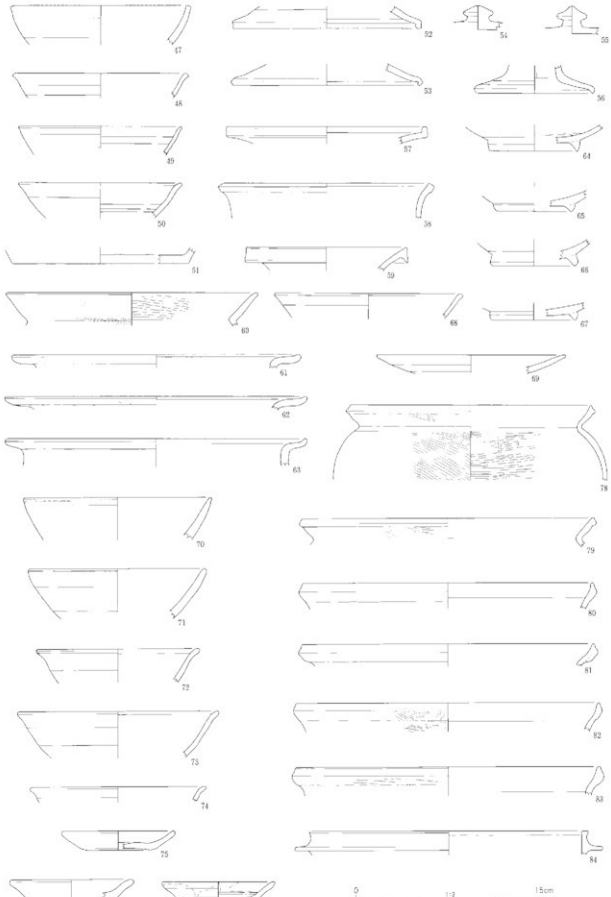
（4）時期不明の遺構

溝（SD15）　1区の北西隅にある溝で、平地から１段下がった中段に位置している。土器は出土しなかった。水田耕作に係る溝と推測する。

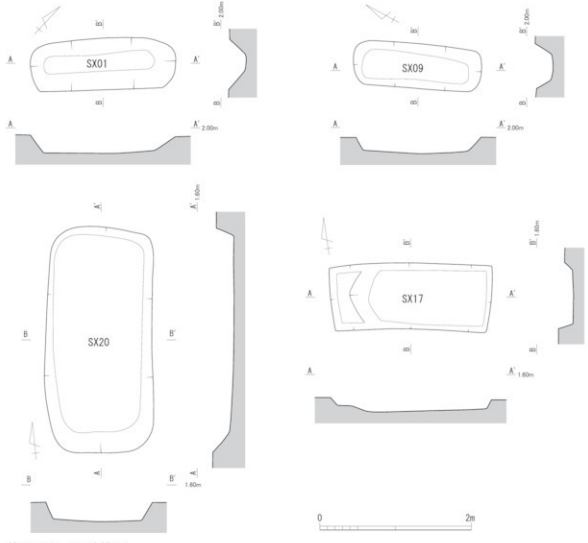
不明土坑（SX10）　1区の中央部にある舟形をした深い土坑で、内部に直径約15cmの一部を加工した丸太や板材が入っていた。土器は34の青白磁が出土した。板材の保存状態等からみて、近代の遺構と判断したが、木材が入れられた目的は不明である。



第 18 図　SR02 遺構図



第 19 図　SR02 出土遺物



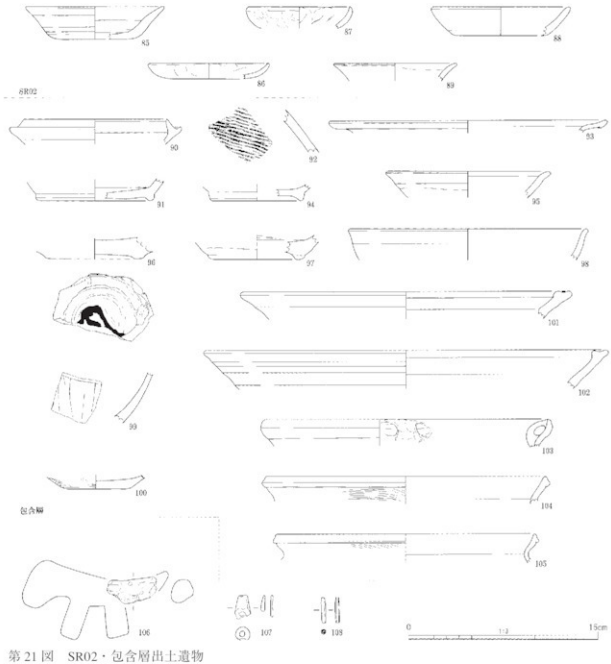
第 20 図　SX 遺構図

不明土坑（SX11）　1 区の中央部にある大きな土坑で、11の平安時代の灰釉陶器碗が出土したが、中世の土器片も多く出土した。時期は中世と判断した。底部で奈良時代のSD11を検出した。

（5）包含層出土土器（第 21 図）

土器は、90 ～ 105 が出土した。

90 は 7 世紀後半の須恵器坏身、91 は奈良時代の須恵器坏身、92 は奈良時代の須恵器甕、93 は奈良時代の土師器甕、94 は平安時代の灰釉陶器である。95 ～ 98 は 13 ～ 14 世紀の山茶碗で、96 の底部裏に墨書が認められる。風という字であろうか。99 は中国産の青磁碗、100 は中世のかわらけ、101 と 102 は 15 世紀のすり鉢、103 ～ 105 は戦国時代の内耳鍋である。



第 21 図　SR02・包含層出土遺物

（6）土製品と鉄滓（第 21 図）

106 は土馬の破片であり、107 と 108 は土錘である。土馬は SR02 南岸の SX20 周辺から出土した。土錘はともに SR02 の中央部から出土した。106 の土馬は尻から尾にかけての部分であり、脚が欠けた痕跡が 2 ヶ所に残っている。奈良時代につくられた土馬と思われる。

SR02 の上層から鉄滓（碗型滓）が出土した。中世の遺物とみられる。

図版No.	遺物No.	取上No.	遺構／層位	種別	細別	残存(%)	反転	器径(cm)	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	その他
13	1	18 他		縄文土器								にぶい黄褐色	P1，2，3，6，10
13	2	80		縄文土器								にぶい黄褐色	P8
13	3	79		縄文土器								にぶい黄褐色	P7
13	4	81		縄文土器								にぶい黄褐色	P9
13	5	34		縄文土器								にぶい黄褐色	P5
13	6	21		縄文土器								にぶい黄褐色	P4
16	7	11	SD06	須恵器	坏身	5	反			11.6		灰色	
16	8	26	SD11	須恵器	有台坏身	10	反				6.0	灰色	
16	9	72	SD14	須恵器	有台坏身	10	反				10.1	灰白色	
16	10	72	SD14	須恵器	摘蓋	5	反	16.0				灰色	
16	11	29	SX11	灰釉陶器	碗	5	反			14.8		灰白色	
16	12	113	SX20	土師器	坏	10	反			11.2		にぶい黄橙色	9 世紀，赤彩
16	13	22	SR01	灰釉陶器	碗	10	反				6.2	灰白色	重ね焼痕，K90
16	14	41	SK01	山茶碗	碗	10					7.9	灰白色	
16	15	11	SK01	陶器	擂鉢	5						淡黄色	
16	16	41	SK01	陶器	擂鉢	5	反			23.4		灰白色	
16	17	108	SP08	土師質土器	内耳鍋	5	反			22.0		淡橙色	
16	18	50	SD04	施釉陶器	碗	5	反			11.4		灰黄色	中世
16	19	111	SD30	須恵器	壺	5	反				8.0	灰白色	
16	20	111	SD30	須恵器	碗	30	反				4.8	黄灰色	糸切痕
16	21	111	SD30	須恵器	甕	5						白灰色	奈良時代
16	22	111	SD30	土師質土器	カワラケ	20	反		1.6	8.4		にぶい黄橙色	
16	23	111	SD30	土師器	羽釜	5	反	24.7		23.0		浅黄橙色	
16	24	4	SX02	山茶碗	碗	10	反				8.4	灰白色	糸切痕
16	25	4	SX02	土師質土器	カワラケ	10	反		1.2	7.0		浅黄橙色	
16	26	4	SX02	土師質土器	内耳鍋	5	反			22.4		灰黄色	
16	27	83	SX03	須恵器	有台坏身	10	反				10.0	灰色	焼きぶくれ
16	28	82	SX03	灰釉陶器	碗	5	反			14.0		灰黄褐色	
16	29	82	SX03	陶器	壺	5	反				12.5	灰色	12 ～ 13 世紀
16	30	36	SX03	陶器	天目茶碗	5						灰黄色	黒褐色の施釉
16	31	83	SX03	陶器	壺	10	反					灰白色	
16	32	82	SX03	土師器	甕	5	反			26.0		浅黄橙色	
16	33	83	SX03	土師質土器	内耳鍋	5	反			22.0		浅黄橙色	
16	34	27	SX10	貿易陶磁器	青白磁	5						灰白色	
16	35	71	SX13	須恵器	坏身	10	反				8.2	灰白色	
16	36	88	SX13	灰釉陶器	碗	20	反				6.7	灰白色	
16	37	71	SX13	山茶碗	碗	10	反			18.0		灰白色	
16	38	75	SX13	山茶碗	碗	10	反				8.0	灰白色	
16	39	88	SX13	山茶碗	碗	10	反				5.3	灰白色	
16	40	75	SX13	土師質土器	土釜	5	反			14.0		浅黄橙色	
16	41	88	SX13	土師質土器	内耳鍋	5	反			22.6		浅黄橙色	
16	42	71	SX13	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.0		浅黄橙色	
16	43	71	SX13	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.0		淡黄色	
16	44	88	SX13	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.0		浅黄橙色	
16	45	75	SX13	土師質土器	カワラケ	20	反			10.0		浅黄橙色	
16	46	75	SX13	土師質土器	カワラケ	10	反			8.8		浅黄橙色	
19	47	106	SR02	須恵器	坏身	10	反			14.4		灰白色	
19	48	106	SR02	須恵器	坏身	5	反			14.0		灰色	
19	49	86	SR02	須恵器	坏身	5	反			13.0		灰色	
19	50	92	SR02	須恵器	坏身	10	反			13.0		灰白色	
19	51	103	SR02	須恵器	箱坏	5	反				14.0	灰白色	
19	52	105	SR02	須恵器	摘蓋	5	反	15.0				灰色	
19	53	106	SR02	須恵器	摘蓋	5	反	15.2				灰色	
19	54	107	SR02	須恵器	摘蓋	10						灰白色	

表 5　遺物観察表 1

図版No.	遺物No.	取上No.	遺構／層位	種別	細別	残存(%)	反転	器径(cm)	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	その他
19	55	86	SR02	須恵器	摘蓋	10						灰色	
19	56	107	SR02	須恵器	高坏	5	反				9.6	灰色	
19	57	97	SR02	須恵器	盤	5	反			16.0		灰色	
19	58	106	SR02	須恵器	壺	5	反			17.2		灰白色	
19	59	106	SR02	須恵器	壺	5	反			13.0		灰黄色	自然釉
19	60	107	SR02	土師器	壺	5	反			20.0		浅黄橙色	古墳時代前期
19	61	97	SR02	土師器	甕	5	反			23.0		浅黄橙色	
19	62	96	SR02	土師器	甕	5	反			24.0		浅黄橙色	
19	63	107	SR02	土師器	甕	5	反			24.0		にぶい橙色	
19	64	96	SR02	灰釉陶器	碗	20	反				7.0	灰黄色	
19	65	106	SR02	灰釉陶器	碗	20	反				6.6	黄灰色	
19	66	105	SR02	灰釉陶器	碗	5	反				7.0	灰白色	
19	67	106	SR02	灰釉陶器	碗	10	反				7.0	灰白色	
19	68	92	SR02	灰釉陶器	碗	5	反			15.0		灰白色	
19	69	106	SR02	灰釉陶器	皿	5	反			15.0		灰白色	
19	70	107	SR02	山茶碗	碗	10	反			15.0		黄灰色	
19	71	106	SR02	山茶碗	碗	10	反			14.2		灰白色	
19	72	106	SR02	山茶碗	碗	10	反			13.0		灰白色	
19	73	96	SR02	山茶碗	碗	10	反			16.0		灰白色	
19	74	106	SR02	山茶碗	碗	5	反			14.0		灰色	
19	75	96	SR02	山茶碗	山皿	40	反		1.6	9.0	5.0	灰白色	
19	76	106	SR02	山茶碗	山皿	10	反			9.9		灰白色	
19	77	96	SR02	山茶碗	山皿	10	反			9.0		淡黄色	
19	78	76	SR02	土師質土器	内耳鍋	10	反			19.8		浅黄橙色	
19	79	92	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.6		浅黄橙色	
19	80	76	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.6		浅黄橙色	
19	81	107	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.8		浅黄橙色	
19	82	76	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			24.5		浅黄橙色	
19	83	14	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			24.7		浅黄橙色	
19	84	76	SR02	土師質土器	羽釜	5	反	24.4		22.1		浅黄橙色	
21	85	92	SR02	土師質土器	カワラケ	30	反		2.6	11.0	6.0	浅黄橙色	ロクロ成形
21	86	107	SR02	土師質土器	カワラケ	10	反			9.6		浅黄橙色	
21	87	89	SR02	土師質土器	カワラケ	10	反			8.4		浅黄橙色	
21	88	92	SR02	土師質土器	カワラケ	10	反		2.3	11.0	7.3	にぶい黄橙色	
21	89	106	SR02	陶器	緑釉皿	5	反			9.8		灰黄色	戦国時代、施釉
21	90	120	包含層	須恵器	坏身	5	反	13.6		11.3		灰色	
21	91	117	包含層	須恵器	有台坏身	10	反				9.4	灰白色	
21	92	3	包含層	須恵器	甕	5						灰色	奈良時代
21	93	2	包含層	土師器	甕	5	反			22.0		浅黄橙色	
21	94	2	包含層	灰釉陶器	碗	10	反				7.4	灰白色	
21	95	72	包含層	山茶碗	碗	5	反			13.0		灰白色	
21	96	3	包含層	山茶碗	碗	10	反				7.6	灰白色	墨書
21	97	3	包含層	山茶碗	碗	5	反				6.6	にぶい黄橙色	
21	98	120	包含層	山茶碗	碗	5	反			19.0		灰黄色	施釉
21	99	76	包含層	貿易陶磁器	青磁	5						灰白色	
21	100	76	包含層	土師質土器	カワラケ	10	反				5.5	浅黄橙色	糸切痕
21	101	72	包含層	陶器	擂鉢	5	反			26.2		明赤褐色	15世紀
21	102	72	包含層	陶器	擂鉢	5	反			32.0		淡黄色	15世紀
21	103	87	包含層	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.0		浅黄橙色	
21	104	87	包含層	土師質土器	内耳鍋	5	反			22.7		浅黄橙色	
21	105	3	包含層	土師質土器	内耳鍋	5	反			21.0		橙色	
21	106	94	SR02	土製品	土馬	20						にぶい橙色	11.2g
21	107	96	SR02	土製品	土錘	30						にぶい橙色	1.5g
21	108	96	SR02	土製品	土錘	100						明赤褐色	0.3g

表6　遺物観察表2

第５章　まとめ

高塚遺跡は、次の２つの点で重要かつ注目される遺跡である。第１に、畿内と関東地方を結ぶ重要な官道である古代東海道のルート上に位置している点である。第２に、西遠江における縄文時代の集落分布の中で最南端に位置している点である。後者については、今回の高塚遺跡第２次発掘調査で３個体分の縄文土器を発見して、はじめて最南端の集落であることが明らかになった。

そこで本章では、前者に関連して、古代東海道の道筋についてのある疑問点と、後者に関連して、南部海岸平野における砂堤上の縄文集落の展開とそれらの集落がもつ共通のある問題点について簡単に触れて、まとめとしたい。

第１節　古代東海道の道筋

２つの道　西遠江には、古代から現代まで、常に２つの重要な東西交通路が存在している。１つは浜名湖の北岸を通り抜けて天竜川中流を渡る北ルートであり、２つ目は浜名湖の南岸を通り抜けて天竜川下流を渡る南ルートである。これらはいつの時代も補完しあって現代まで続いている。原始・古代には、豊川河口、浜名湖今切口、天竜川河口の３つの難所を避けて通る北ルートが大いに利用されたと考えられている。そして奈良時代以降になると南ルートが本街道（古代東海道）となり、北ルートは南ルートが通行不能になった時のための脇街道の役割を担った。中世から江戸時代も同様で、南ルートが東海道となり、北ルートは姫街道（本坂道）と呼ばれる脇街道の役割を果たした。そして近代に鉄道網が整備されると、南ルートに東海道本線が建設され、北ルートに二俣線が建設された。

第 22 図　律令期の西遠江

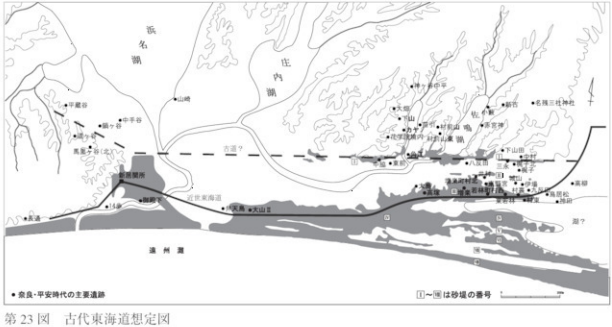
湖底遺跡　浜名湖の南半部には、多くの地点に縄文時代～鎌倉時代の湖底遺跡が存在する。ゼゼラ遺跡、スモテ遺跡、渚園遺跡、村櫛海水浴場沖遺跡、村櫛海岸遺跡、弁天島遺跡などである。これらの湖底遺跡が存在する原因は、15 世紀末に発生した急激な地盤沈下と考えられている。そして 15 世紀以前の浜名湖南岸は、第 23 図に示すように広い範囲が陸地化しており、現在の庄内湾は小

さな湖にすぎなかった。その平野の中を浜名川が蛇行して南流していたと考えられている。

1つの疑問点　奈良・平安時代における古代東海道の道筋は、近世東海道とほぼ同じルートと想定されている。すなわち鳥居松遺跡付近から第3砂堤上を西進し、高塚遺跡を通過するとやや海岸方向にカーブして現在の舞阪港付近に至るルートである。しかしこのルートには、1つの疑問点がある。それは"なぜ"ルートを南へ曲げたのかという点である（第23図参照）。当時、浜名湖の南岸一帯は陸地化していたはずであり、敷智郡衙であった伊場遺跡群から浜名郡衙が想定される鷲津付近まで、ほぼ直線ルートで行けたのである。曲げる必要は何もなかった。古代の官道は直線ルートを基本に設計されていたのではなかったのか。そこで考えられるのが、15世紀末に浜名湖の南岸一帯が地盤沈下したとき、古代東海道の一部が浜名湖および庄内湾の湖底に沈んだために、近世東海道ではルートを南へ曲げざるを得なかったという仮説である。

一直線の大溝　最近、興味深い遺構が中村遺跡で発見された。中村遺跡の発掘調査は雄踏街道の拡幅に伴うものであったため、調査区は幅6～10m、東西方向へ全長約700mの細長い形状をしていた。その細長い調査区の中で東西方向へ続く推定650mの人工的な溝を検出した。上幅が約4m、下幅が1.5～2mの規模をもち、壁面の崩壊を防ぐために、杭を打ち粘土を貼り付けて養生してあった。溝の下層から7～8世紀の須恵器、土師器、土製品、木製品、木簡などが多数出土し、上層から10世紀の灰釉陶器が出土した。検出した溝は1条であったが、調査区の外にもう1条ある可能性がある。この溝は大規模な区画溝もしくは道路の側溝である可能性が指摘されている。静岡市曲金北遺跡で発見された古代東海道の側溝は幅4～5mであり、中村遺跡の大溝とほぼ同じである。遺物の出土状況も類似している。

第1砂堤上の道　この中村遺跡の大溝は道路の側溝と確認されたわけではない。しかし第1砂堤上に古代東海道を想定できる好条件が揃っている。以下のようなものである。①地盤が安定してい

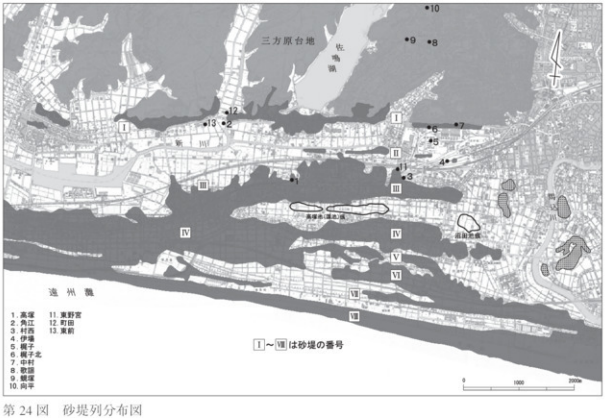


第23図　古代東海道想定図

る。台地に接しかつ最初に形成された砂堤であるため、基盤が安定している。また第３砂堤に次いで距離が長く、真っ直ぐに東西方向に伸びている。②主要な雄踏街道が第１砂堤上を通っていた。バイパス道路ができる以前は、第１砂堤上の雄踏街道がこの地域における重要な東西交通路であった。③第１砂堤およびその両側には、各時代の主要な遺跡が連なっている。縄文時代は多量の遺物が出土した中村遺跡、梶子北遺跡、角江遺跡があり、弥生時代は中核的な集落が想定される梶子遺跡、伊場遺跡、角江遺跡、東前遺跡がある。古墳時代は大集落遺跡である大平遺跡、中平遺跡、坊ヶ跡遺跡があり、古代は木簡が出土している伊場遺跡、梶子北遺跡、東前遺跡がある。

第２節　砂堤上の縄文集落

海岸平野の縄文遺跡　近年の発掘調査によって、浜松市南部海岸平野には多くの縄文時代の集落が分布していることが分かってきた。第１砂堤上には、町田遺跡、中村遺跡、梶子北遺跡（北半）が立地し、町田遺跡で後期後半の土器が出土、中村遺跡と梶子北遺跡で多数の石器類と共に前期末～中期初頭の土器が出土した。第1･2砂堤列間湿地には、梶子北遺跡（南半）、梶子遺跡（９次）、同（10次Ｂ）、角江遺跡、東前遺跡があり、梶子遺跡（10次Ｂ）で後期の土器が出土、角江遺跡と東前遺跡で後期後半～晩期の土器他が出土した。第２砂堤には、伊場遺跡、城山遺跡（７次）があり、伊場遺跡で石器類が出土、城山遺跡（７次）で前期末～中期前半の土器が出土した。第３砂堤には、村西遺跡、東野宮遺跡、高塚遺跡があり、村西遺跡で石斧と石錘および前期末～中期初頭の土器が出土、東野宮遺跡で石錘と凹石が出土した。そして高塚遺跡２次で中期前半の土器が３個体出土した。



第 24 図　砂堤列分布図

番号	遺跡名	場　所	標高(m)	時　期	出土遺物
1	ゼゼラ	浜名湖湖底	－1.5	中初,後前～晩前・後	石斧,石錘,土器
2	スモテ	浜名湖湖底	－1.5	中初,後後,晩前・後	骨鏃先,石錘,土器
3	渚園	浜名湖湖底	不明	中期	土器
4	村櫛海水浴場沖	浜名湖湖底	－1.5	中初,後後,晩後	土器
5	村櫛海岸	浜名湖湖底	約－1	後前	土器
6	新居弁天沖	浜名湖湖底	約－1.5	中初～中中,後後～晩末	土器
7	町田	第一砂堤	－1.5	後後	土器
8	中村(南伊場)	第一砂堤	±0	前前～中前,後前	土器,石鏃,石錐,石匕,磨石
9	梶子北(北半)	第一砂堤	±0	前前～中初,晩前	繊群,石錘,石鏃,石匙,石皿,土器
10	梶子北(南半)	第一・二砂堤列間湿地	－0.5	後前～中,晩末	土器
11	梶子9次	第一・二砂堤列間湿地	－1.8	中初	土器
12	梶子10次B	第一・二砂堤列間湿地(流路)	－0.9	晩前	土器
13	角江	第一・二砂堤列間湿地	－1.5	後後,晩前,晩後	土器
14	東前	第一・二砂堤列間湿地	－1.2	後後,晩末	土器
15	伊場	第二砂堤	＋1.5	晩後	石斧,石鏃,石錘
16	城山7次	第二砂堤	＋2	前末,中前	土器,石鏃,石錘
17	村西	第三砂堤	＋1	前末～中初,後前,後後	石斧,石錘,土器
18	東野宮	第三砂堤	＋2	不明	石錘,凹石
19	高塚	第三砂堤	＋1.7	中期	土器

表7　南部平野の縄文遺跡

砂堤列への進出　従来、南部海岸平野は縄文時代中期までは海面下に沈んでおり、後期～晩期の海退に伴い陸地化したと考えられてきた。当然、各砂堤列も海面下であった。しかし最近の一連の調査により、それは間違いであることが分かってきた。

縄文時代前期前半の土器が、第1砂堤上の中村遺跡と梶子北遺跡（北半）から出土し、前期末の土器が第2砂堤上の城山遺跡7次と第3砂堤上の村西遺跡から出土していることから、縄文時代前期末の時点で少なくとも第3砂堤までが陸地化していたはずである。また第1・2砂堤列間湿地の梶子遺跡（9次）で中期初頭の土器が出土していることから、砂堤列間湿地のような低地においても中期初頭までには陸地化したとみられる。以上のように、従来考えられていたより早い時期から大規模に陸地化し、生活拠点となっていたと推定される。

共通のある問題点　問題は遺構面の標高値である。第3砂堤上の高塚遺跡で標高1.7 m、東野宮遺跡で2 m、村西遺跡で1 mであり、第2砂堤上の城山遺跡（7次）で2 m、伊場遺跡で1.5 mである。これらの数値は一見したところ何の問題もないようであるが、実は大きな問題点が隠れている。それは溝や川の底面が標高0 mより低くなり水が流れないのである。次に、第1砂堤上の長田遺跡で標高－1.5 m、中村遺跡（南伊場）で0 m、梶子北遺跡（北半）で0 mであり、第1・2砂堤列間湿地の梶子北遺跡（南半）で標高－0.5 m、梶子遺跡（9次）で－0.8 m、梶子遺跡（10次B）で－0.9 m、角江遺跡で－1.5 m、東前遺跡で－1.2 mであり、浜名湖湖底遺跡の標高値は推定－1 m～－1.5 mであり、実際に水面（海面）下にある。このようにすべての遺跡の遺構面は現在の海水面より低い位置にある。これでは生活することもできず、竪穴住居も建てられない。またこれより約2 m下にある溝と川は絶対に流れない。これらは明らかに地表面が相対的に下降していることを示している。

地表面の下降　地表面の相対的な下降を考える時には、①地震等による地盤沈下、②沖積平野の

沈み込み、③海水面の上昇、以上の３点を考慮に入れる必要がある。①当地方はフィリピン海プレートが大陸プレートに潜り込む位置にあり、大きな地震や地盤沈下が度々発生する。15 世紀末に浜名湖南岸地域が湖底に沈んだ原因は地震による地盤沈下とみられ、そのときに南部海岸平野も一緒に沈下した可能性がある。②沖積平野は確実に年数 mm ずつ沈み込んでおり、数千年が経過すれば、数 m沈み込む計算になる。③海水面が上昇すれば、相対的に地表面の下降を招く。

今後の南部海岸平野における発掘調査の増加と、前記３点に関するデータの集積によって、砂堤上の縄文集落の動向と様相が明らかになっていくものと思う。期待したい。

おわりに

本書を執筆するにあたって、元浜松市博物館長の向坂鋼二氏に高塚遺跡出土の縄文土器および周辺地域の縄文土器編年について御教授していただいた。記して感謝の意を表したい。

参考文献

浜松市教育委員会　1982『西鴨江　中平遺跡１』
舞阪町教育委員会　1972『浜名湖弁天島海底遺跡発掘調査概報』
1984『浜名湖弁天島海底遺跡』第２次発掘調査概報
（財）浜松市文化協会　1994『梶子遺跡Ⅸ』（本文）
1995『西鴨江　中平遺跡２』
1995『東野宮遺跡Ａ』
1996『若林　村西遺跡』
1997『城山遺跡Ⅵ』
1997『梶子北遺跡』遺構編（本文）
2002『東前遺跡』
2004『梶子遺跡Ｘ』
2004『坊ヶ跡遺跡』
2005『梶子北遺跡』（三永地区）遺構本文編
2005『中村遺跡』（南伊場地区）本文編
2005『中村遺跡』（南伊場地区）本文編図版
2005『中村遺跡』遺構本分編
（財）浜松市文化振興財団　2005『東若林遺跡』
2007『東若林遺跡』２次調査
2008『高塚遺跡』
2008『東前遺跡Ⅱ』
2009『舞阪町天白遺跡』
2010『梶子遺跡 11 次』

写真図版１

A　１区全景（北西から）

B　１区全景（南西から）

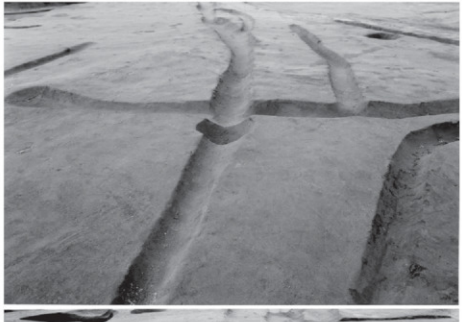
写真図版２

A　１区・２区全景（北西から）

B　１区・２区全景（南西から）

写真図版３

１区中央部
（南東から）



SD04・他
（南東から）

SD08・他
（東から）

写真図版 4

SX10
（東から）

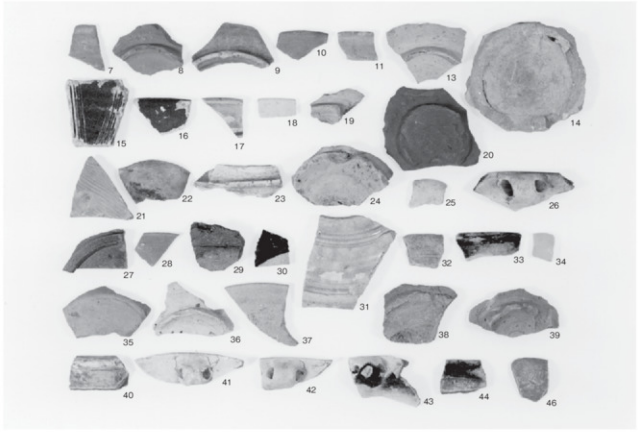
SX09・他
（東から）

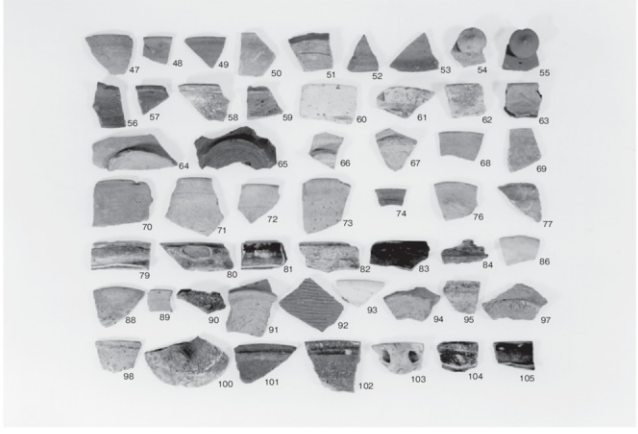
SX08・SX07
（西から）

写真図版5　出土遺物1

縄文土器

写真図版６　出土遺物２


7
8
9
10
11
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
46


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
76
77
79
80
81
82
83
84
86
88
89
90
91
92
93
94
95
97
98
100
101
102
103
104
105

写真図版7　出土遺物3

12

78

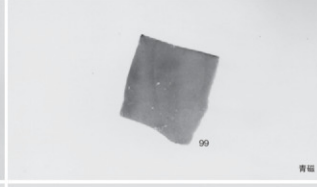
45

96
墨書土器

75

106　107　108
土馬・土錘

85


99
青磁

87

鉄滓

報告書抄録

書名		高塚遺跡（たかつかいせき）　２次				
副書名						
巻次						
シリーズ名・番号						
編著者名		大野勝美				
編集機関		浜松市教育委員会 〒430-0929　浜松市中区中央1-2-1　イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部文化財課 （浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-0946　浜松市中区元城町103-2　　053(457)2466				
発行機関		財団法人　浜松市文化振興財団 〒430-7790　浜松市中区板屋町111-1				
発行年月日		2011年 3 月18日			発掘面積	1,050㎡
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘期間
たかつかいせき 高塚遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 みなみくたかつかちょう 南区高塚町	22202	4-02-11	34° 41′ 27″	137° 40′ 52″	2010年 9月15日～ 11月30日
発掘原因	記録保存調査					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
高塚遺跡		縄文		縄文中期土器
	集落	飛鳥 奈良 平安	溝、土坑、川	須恵器、土師器、灰釉陶器、土馬
	集落	鎌倉 室町	溝、土坑、小穴	山茶碗、青磁、内耳鍋、 かわらけ、鉄滓

高塚遺跡２次

2011年３月18日発行

編集機関　浜松市教育委員会

発行機関　財団法人 浜松市文化振興財団

印　　刷　株式会社　シバプリント